日本医史学雑誌　第62巻第1号（2016）　3–15

平清盛の死因
――藤原邦綱の死との関連を中心に――

赤谷　正樹

東北大学大学院文学研究科

受付：平成27年9月16日／受理：平成28年1月15日

要旨：平清盛は，想像を絶する高熱に襲われて，治承5年（1181）の春に薨去した．「治承三年の政変」で，清盛は後白河院政を武力で停止し，翌年には傀儡としての高倉院政を実現したが，それも束の間，1年足らずで高倉院は崩御し，再び後白河院政が復活した直後の清盛の死であった．清盛の死因については，これまで文学や医学の分野で論じられ，マラリアや脳血管障害，あるいは風邪をこじらした末の肺炎や髄膜炎，さらには電撃性猩紅熱などと，様々に診立てられてきた．しかし，日に日に勢力を増す源氏軍の討伐に加えて，後白河院との関係修復にも苦慮していた清盛と腹心の藤原邦綱が，同時期に発病し，相前後して死んでいった事実に着目すると，二人はともに溶連菌感染症だったことが推測される．そして，そこからは凋落前夜の平氏の戦略が，清盛と邦綱の密談で決せられたことが窺えるのである．

キーワード：溶連菌感染症，平清盛，藤原邦綱

はじめに

(1) 文学に描かれた清盛の死

平清盛は，治承5年（1181）閏2月4日，病を得て64歳の生涯を終えた．『平家物語』延慶本・第三本（巻六）「十三　太政入道他界の事　付けたり様々の怪異共有る事」では，

> 病付き給ひける日より，水をだにも喉へ入れ給はず．身中熱する事，火燃ゆるが如し．臥し給へる二，三間が中へ入る者，あつさ堪へ難ければ，近く有る者希也．宣ふ事とては，「あたあた」と計り也[1]．

と，その病状は異常な高熱であったことを記し，「比叡山千手院と云ふ所の水を取り下して石の船に入れて，入道其に入りて冷やし給へども，下の水は上に涌き，上の水は下へ涌きこぼれけれ」，遂には「悶絶躃地して，七日と申ししに，終にあつち死に死にけり」というのである．

こうした想像を絶する異様な病状は，多くの作家たちの好奇心を様々に触発してきた．

作家が手掛けた『平家物語』のリメイク作品は，戦前では昭和11年（1936）の幸田露伴による『新訂平家物語』（東京：京文社書店）と，同15年の舟橋聖一の『新風平家物語』（東京：萬里閣）がある．これらはともに『平家物語』伝本のひとつ覚一本のダイジェストという性格が強く，清盛の病名には言及していない．

戦前の作家たちは，壮絶な描写に着目はするが，病そのものには関心が薄かったようだ．しかし，戦後を迎え，医療技術の飛躍的な進歩とともに，作家たちの創造力は，より具体的な病名の究明に向けられるようになる．

国民文学の巨匠吉川英治は，『新・平家物語』（昭和25年から32年にかけて「週刊朝日」に連載）で，清盛の病を「潜伏瘧」として，「発作すると猛烈な大勢を示すが，おさまると，平調に回る[2]」

と，その症状を記している．

「瘧」とは，『広辞苑（第六版）』（東京：岩波書店）によると，「間欠熱の一つ．隔日または毎日一定時間に発熱する病で，多くはマラリアを指す」，季節は「夏」とある．

史伝文学の海音寺潮五郎は，『武将列伝』（昭和34年から38年にかけて「オール読物」に連載）「平清盛」の章で，九条兼実の日記『玉葉』の「禅門頭風を病む」との史実に着目して，

> 頭風とは頭痛のことだ．はげしい頭痛がしてこんなに早く死の転機をとる病気としては，先ず肺炎が考えられるが，別に咳が出るとも，熱が高いとも書いてない．ぼくは脳出血による死であり，五，六日間のはげしい頭痛はその前駆症状だったと思う……[3]．

と記している．

晩年，女性史も手掛けた吉屋信子の『女人平家』（昭和46年2月から10月まで「週刊朝日」に連載）では，「当時の医師たちの診断によると“頭風”であった」，「それはおそらく，脳の血管障害ではなかったろうか[4]」と推測している．

このほか，昭和57年には，評伝にも名作を残す水上勉が，『平家物語抄』（東京：学習研究社）を刊行しているが，これも覚一本のダイジェストで，病について独自の考察は加えていない．

平成に入ると，推理小説からノンフィクションまで幅広い分野で活躍する森村誠一が『平家物語』（平成5年8月から6年3月まで「週刊ポスト」に連載）を著し，「清盛の症状は労瘧（ろうぎゃく）という慢性マラリアで，三日目ごとに悪寒，戦慄が始まり，高熱を発する．高熱が極まったところで大量の汗をかいて熱が下がる[5]」と，吉川英治同様，三日熱タイプのマラリア説をとっている．

女性を描いた歴史小説で著名な宮尾登美子の『宮尾本・平家物語』（平成13年から14年にかけて「週刊朝日」に連載）では，「激しき悪寒ののち高熱ともなれば，傷寒か瘧（おこり）かと思われますが，それにしてはお言葉に痺（しび）れがござりまする．また湯水の嚥下（えんげ）も困難のようにお見受けいたしますれば，他の病いかも知れませず[6]」と，典薬頭（てんやくのかみ）丹波頼基の「傷寒（腸チフスの類）か瘧（マラリア）」という曖昧な診立てを記している．

このほか，橋本治も平成10年から全15巻の大部『双調平家物語』（東京：中央公論新社）を刊行しているが，病名には触れていない．

（2）医師たちの診立て

多くの医師たちも，専門的な見地から様々な診立てを試みている．

江戸時代後期の医師・奈須恒徳は『本朝医談』の中で，「平相国の身，火のやうになりたるも，已に富貴きはめつ，若くは欲にあかずして乳石の剤を服せられし歟[7]」と，不老不死のための仙薬として，鍾乳石を飲んでいたのではないかと推測した．

現代の医師で医学史研究家の服部敏良氏は，『日本医学史研究余話』の中で，

> 清盛の発病から死亡迄僅かに過ぎず，しかも初症は頭痛であり，感冒に罹ったものと想像される．感冒より肺炎が併発し，高熱呼吸困難等の諸症のため苦しんだものと思われる[8]．

と，カゼから肺炎などを併発したと診る．

脳神経外科医で作家の若林利光氏は，『英雄たちのカルテ』の中で，

> 特に手足にマヒがあったとも書かれていないので，脳出血や脳梗塞は考えにくい．（中略）確率的には，脳炎よりはるかに頻度の高い，髄膜炎だったのではないかと推測される．（中略）カゼから中耳炎か副鼻腔炎を起こし，髄膜炎にまで悪化したのではないかと推測される[9]．

と，まさに「カゼは万病のもと」であることを指摘している．

医師で歴史研究家の大坪雄三氏は，『英雄たちの臨終カルテ』の中で，「従来，清盛は風邪をこじらして肺炎で死んだとされるが，本当の死因は，比較的大量の左前頭部出血に続発した，視床

下部さらには中脳圧迫によるものであった[10]」と，服部説や若林説には否定的だ．また，「蚊のいない二月に発病している点から，マラリアや日本脳炎を原因とするのは無理[11]」と指摘する．

さらに，医師で作家の篠田達明氏は，平成13年11月号の『芸術新潮』（東京：新潮社）「ドクター・シノダの人物画診断」の中で，清盛の死因を溶血性レンサ球菌（以下「溶連菌」という）による電撃性猩紅熱とする新説を唱えた．

篠田氏はさらに『病気が変えた日本の歴史』の中で，それまでの諸説を検証し，

> 水をかけてもたちまち蒸発してしまうほどの高熱と強い頭痛，扁桃腺が腫れて声が枯れ，呼吸困難におちいった容子，全身にひろがった紅斑，およそ七日間で死にいたった転帰などから，清盛は溶連菌による悪性の電撃性猩紅熱にたおれたのではないか[12]．

と，確信を深めている．

その後，篠田氏は，2013年に『病気が変えた日本の歴史』を加筆・修正して，『偉人たちのカルテ』を刊行し，1999年4月1日に「伝染病予防法」に替えて「感染症法」が施行された際に，「法定伝染病」だった猩紅熱が，都道府県知事に届出義務を負う1類から5類の重篤な感染症から姿を消したことから，5類に掲げられた「劇症溶血性レンサ球菌感染症」が清盛の新たな病名と推測した．ただ，「電撃性猩紅熱という以前の病名は清盛の病態をよくあらわしていると思うので，本書ではこれを採用した」と記している[13]．

こうして，マラリアや脳血管障害，あるいは風邪をこじらせた末の肺炎や髄膜炎，さらには電撃性猩紅熱，劇症型溶血性レンサ球菌感染症などと，様々に推測されてきた清盛の死因だが，古典文学研究の分野では，冨倉徳次郎の『平家物語全注釈』や，佐々木八郎の『平家物語評講』，杉本圭三郎の『平家物語』のいずれもが，岩淵悦太郎が『国語と国文学』の昭和12年7月号に発表した，「あつち死」とは「もだえ死にのこと．『類聚名義抄』に〔跳〕の字を〔アツチハタラク〕と読んでいる．跳ぬる意味の動詞の連用形」との説を語釈として引用するにとどまっている[14]．また，歴史学者の元木泰雄氏は，「親しい邦綱と同時に病んだことから感染症の疑いが強い[15]」と，一歩踏み込んではいるが，病名の究明などには及んでいない．

本研究は，延慶本・第三本（巻六）「廿　五条大納言郡（「邦」の誤り．〔筆者補足〕）綱卿死去の事」の文末にある「大政入道とせめて志の深きにや，同日に病付きて，同月に遂に失せ給ひぬ．哀れなりける契りかなとぞ人申しける」と，清盛の腹心として辣腕を振った藤原邦綱の人生に着目して，時代の画期に潜む歴史や思想の中から，清盛と邦綱の絆の深さを明らかにし，相前後して死んでいった必然と，その死因を明らかにする試みである．

1．清盛の野望をひらいた策略家邦綱

（1）合従連衡の狭間を生きた邦綱

藤原邦綱は，保安3年（1122）正月1日，従五位上の藤原盛国の子として生まれた．母も従五位下の藤原公長の娘で，普通ならば高位への昇進を望むべくもない家柄だった．

『平家物語』延慶本・第三本（巻六）「廿　五条大納言郡〔原文ママ〕綱卿死去の事」には，仁平3年（1153）6月6日に四条内裏で発生した火災から，近衛天皇を邦綱が救出したことを契機に，関白藤原忠通の家司となったことなどの立志伝が記されている．この後，伊予守・播磨守・中宮亮などを歴任して頭角をあらわし，『愚管抄』が「邦綱とて法性寺殿（忠通〔筆者補足〕）のちかごろ左右（そう）なき者[16]」という，並ぶ者のない忠通の側近となったのである．そして邦綱は，摂関家の内訌や後白河天皇の即位問題などの渦中で，貴族社会を生き抜く術を学んだ．

また，延慶本・第一本（巻一）「廿三　五条大納言邦綱の事」は，晩年の邦綱を次のように記す．

> 法性寺殿隠れさせ給ひて後，太政入道（清盛〔筆者補足〕）に執り入りて，さまざまに宮仕へける上，日ごとに何にても一種を奉られけれ

ば，「所詮現世の得意，此の人に過ぎたる人有るまじ」とて，子息一人入道の子にして経邦（清邦が正しい〔筆者補足〕）と申し付けて侍従に成されぬ．三位中将重衡を聟になしてけり．後には，中将，内の御乳母に成られたりければ，其の北の方をば母代とて，大納言の典侍とぞ申しける．

と，忠通が死去した後は，清盛に取り入って，清盛をして「現世の得意，此の人に過ぎたる人有るまじ」と，この世で心が通い合う友人は，邦綱が一番であるとまでいわしめ，子息清邦を清盛の養子にしたり，娘輔子を重衡の正室とするなど平氏との関係を深めていった．

永万2年（1166）7月26日，摂政基実が24歳でこの世を去ると，策略家・邦綱として本領を発揮する事件が起きた．

基実が死去したとき，その子基通はいまだ無冠の7歳の幼少であったため，摂政は忠通の5男で，基実の異母弟で左大臣の基房が継ぐことになったが，この時，藤原不比等の邸宅にはじまった奈良郊外の佐保殿や，藤原氏の氏寺興福寺，道長創建の法成寺，頼通創建の平等院など，歴代の摂政関白が継ぐことになっていた財産だけを分与し，氏長者の地位と九州の島津荘をはじめ全国に点在する膨大な摂関家領や，累代の記録，宝物などの大部分は嫡男基通が成人するまで，清盛の娘で基実の正室盛子が管理するという，平氏による「摂関家領押領事件」が発生したのである．

『愚管抄』は，この事件を邦綱の入れ知恵であったと記す．その内容を要約すれば，藤原氏の家督は必ずしも摂政関白になる人が受け継ぐものではなく，元々はそれぞれの家ごとに相続されていたものを忠実の時代にひとつにまとめられ，これを忠通・基実と受け継いだのであるから，北政所が嫡男基通が継ぐべき遺産を管理しても，道理にはずれることはないと，邦綱が清盛に助言したというのである[17]．

この事件の背景には，邦綱が忠通の嫡流である基通に，いつか摂関家の地位を取り戻したい意図が読み取れる．一方清盛にとっては，摂関家領を管理下に置くことで，一門の財政力を堅固なものにするとともに，摂関家に対する強い影響力を維持するという利があった．結果的に，盛子が継いだ故基実の近衛家は清盛に属するものとする宣旨が下される（『玉葉』治承3.6.18）．

事件から3か月後の仁安元年（1166.8月に「永万」から改元）10月10日，後白河院の意向で，滋子との間に生まれた憲仁親王が皇太子に立てられ，内大臣九条兼実が皇太子傅（ふ）に，権大納言平清盛が春宮大夫に，そして従三位藤原邦綱が権大夫にそれぞれ任じられたが，『玉葉』の同日条には，「前参議，如何，如何[18]」と，正月に蔵人頭から参議になり，6月にはこれを辞任していた邦綱の異例の取立てに驚きを隠せない．このほか亮（りょう）（官職）には清盛の弟の教盛，大進（たいしん）（官職）には4男知盛，乳母には嫡男重盛の室（経子）と，邦綱の娘（邦子）が選ばれるという清盛を要とする布陣であった．

さらに，仁安3年に憲仁親王が高倉天皇として即位すると，岳父清盛の宮廷内における勢力が形成され，後白河法皇との協調関係に亀裂が生じ，法皇は平氏打倒の謀議「鹿ケ谷事件」に加わるなど，その対立は表面化することになる．

（2）忠通嫡流の摂関家を復活

邦綱という人は，運命を左右する岐路に何度となく立ちながらも，その才覚で苦境を乗り切っている．その最大の事件が，「治承三年の政変」だった．

この政変は，治承3年（1179）11月14日，清盛が数千の軍兵を率いて隠居先の福原から上洛して，力によって後白河院政を停止するとともに，反平氏勢力の弾圧を強行して，高倉天皇の親政をはかった事件である．

『玉葉』は，政変に至った理由として，次の3点を挙げている．

①清盛の嫡男・重盛が7月に亡くなると，その知行国が後白河院に没収され，重盛の後継者維盛が否定されたこと．

②先立つ6月，清盛の娘で基実の正妻盛子が，摂関家領の大部分を相続したまま亡くなる

と，清盛はこの遺領を高倉天皇に相続させて支配体制を維持しようとしたが，後白河院は王家の家長としてこれを自らの管理下においたこと．

③盛子の養子だった19歳で従二位の基通（母は従三位藤原忠隆の娘）が，基房の3男でわずか8歳の従三位・師家に権中納言昇進を先んじられ，清盛の摂関家の後継人事構想が否定されるなど，清盛に対する牽制が露骨になったこと．

これらは，いずれも平氏の政治的な基盤を揺るがし，清盛を国政から排除しようとするものであったから，一気に政変へと発展したのである．

この政変では，基房は関白を解任され，後任には20歳の基通が，従二位右中将から中納言・大納言の職を飛び越えて一躍内大臣に昇進し，翌4年の安徳天皇の践祚とともに正二位関白，4月には従一位に昇叙された．これによって，「摂関家領押領事件」以来，忠通嫡流に摂関家を取り戻したいという邦綱の宿願は叶えられたのである．

ただ，非参議から関白になった基通は，公事や朝儀について「一切未だ習はず知らずと云々」（『玉葉』治承3.12.30）と兼実に漏らすほど実務に疎く，慈円は『愚管抄』の中で，これまでの摂政関白で，これほど能なしで役にたたない人はいまだかつてなかった[19]と酷評するほどであった．

また『愚管抄』は，「やがて関白をば備前国へながすともなく，邦綱が沙汰にてくだし申けれ[20]」と，11月18日には太宰府への配流と決まった基房だったが，邦綱のはからいで21日に出家して，邦綱の知行国である備前国に送られたとあり，政変の後も，邦綱と基房の親密な関係は維持されていたこと，さらに邦綱は清盛の決定に実質的な修正を加えることができる存在であったことがうかがえる．

新たな関白に基通を迎えて，親平氏と中間派の貴族で固められた高倉親政は，翌治承4年4月の安徳天皇の即位によって，平氏の傀儡である高倉院政を実現した．

こうして，政変によって平氏が国政を掌握すると，中央政界から排除された源氏や，南都を中心とする権門寺院などとの対立が激化した．4月の「以仁王の乱」に続いて，8月に頼朝が伊豆で挙兵すると，各地の平氏に不満を抱く在地領主などがこれに呼応した．

平氏は，宣旨によってこれら逆賊の鎮圧にあたったが，10月に清盛の嫡孫・維盛軍が「富士川の戦い」で敗走して以降は，関東地方から東海地方にかけての大半が，頼朝の勢力圏となった．6月には福原に遷都したものの，11月には還都し，12月2日には4男知盛を近江へ，重盛の2男資盛を伊賀へ，さらに25日には5男重衡の大軍を反平氏で蜂起した興福寺の掃討に差し向け，興福寺や東大寺の堂舎が灰燼に帰す事件に発展した．

そんな最中，清盛と邦綱の前に，新たな問題が立ちはだかった．

『玉葉』の治承4年12月19日条によると，「伝へ聞く，来たる二十五日，中宮院号の事あるべし．二十六日故摂政（基実）殿の姫君〔顕輔卿外孫〕，准后の宣旨を蒙り，即ち入内あるべし．中宮院号の後，上皇の宮に常住せらるべし．仍つて同輿に人無き間，忽にこの沙汰出で来たる．即ち中宮の養子たるべしと云々」と，高倉上皇の中宮で清盛の娘徳子に院号を授けて，病床にあった上皇の許に常住することが決まり，幼帝安徳天皇の同輿（どうよ）の准母に基実の忘れ形見通子が押されたのである．これは「わが朝后位にあらざる人，同輿の例無し」（『玉葉』治承5.2.17）という先例によるものであった．

『玉葉』の12月23日条では，外記大夫の中原師景が来て，「来たる二十五日院号，并びに准后の事，延引し了んぬと云々．これ重家卿の事に依り，准后延引す．随つて又院号，明春行はるべしと云々」と，21日に伯父藤原重家を亡くした通子が喪中となり，准后の宣旨が延引となったというのである．

この宣旨については『山槐記』治承4年12月24日条に，中宮徳子が「摂政の北方は我妹，帝の叔母也．其（天皇〔筆者補足〕）の傍に寄るは重く，彼の人を准后とすべき哉[21]」と興味深い意見を述べたとある．『孔雀経御修法記』には，12月19日「東寺西院に於て，孔雀経を修し，（高倉院の〔筆者補足〕）御悩平癒を祈らしむ[22]」とあ

り，高倉院の病状が重篤で，速やかな准后の決定を望んでの提案だったのかも知れない．しかし，これは清盛と邦綱にとっては，厄介な提案だったはずだ．それというのも，政変によって平氏政権を確立した清盛ではあったが，すべてが意のままになったわけではなかったからだ．

2. 平氏の延命を模索する邦綱

(1) 忠通嫡流の死守と平氏の延命の奇策

高倉院政下における国家意思は，幼帝安徳天皇の統治権を上皇が代行する形で決定し，それを関白基通以下による公卿議定で最終的に決定するのが一般的だった．この公卿議定に加わる議政官の数は，政変直前には29人で，うち平氏一門は権中納言平時忠，同平頼盛，参議平教盛の3人であったが，政変後には25人となり，うち平氏一門は時忠と教盛の2人となった．この数について田中文英氏は，「この時点で平氏方には公卿になりうる適格者がほとんど存在しないという事情があった」こと，さらに清盛が，「公卿僉議の場における国政審議の権限と機能を形骸化」しようとしていたからと推測する[23]．

勿論，議政官の中には，親平氏派も少なくなかったはずだが，案件が高倉院と関白基通に直接関係するものであったから，清盛にとっては，徳子の影響力は決して楽観視できない問題であったはずだ．

また，忠通嫡流の摂関家を守ろうとする邦綱は，さらに深刻な現実に直面していた．

この当時，平氏が自由に行使できた武力は，伊勢・伊賀・瀬戸内海沿岸などを中心とする限られた家人であり，諸国の国衛に組織されていた多くの地方武士を動員するには，統治権を掌握する天皇か院の命令が不可欠であった[24]．治承4年の年末には，逆賊・源氏軍の勢いはすでに平氏一門の力だけで鎮圧できる状況ではなかったから，仮に高倉院が崩御するようなことがあれば，後白河院の影響力は計り知れないという現実があった．後白河院政が復活しても，基通を摂関家として存続させたい邦綱にとっては，基通と清盛との関係に距離を置きたかったはずである．従って同輿の准后が，当初計画どおり政治色の薄い通子になることが清盛と邦綱の共通の願望であったに違いない．

『玉葉』治承5年正月8日条は，「故中摂（基実）政の女（去年准后あるべき由，その沙汰ありし人なり），従三位に叙せら」れたことが記され，ふたりの思惑どおりに事は進んでいた．しかし，13日条では，兼実が高倉院に赴いて，邦綱に院の病状を尋ねたところ，「病ひ至りて重し．命旦暮にあり」と，高倉院政の終焉が間近であることを聞かされる．

さらに兼実は，邦綱に替わって応対した右中弁の藤原兼光から，驚くべき噂話を聞かされる．

それは，高倉院が崩御したら，徳子を後白河法皇の後宮に納めるというもので，清盛と時子は承諾したらしいが，徳子本人はそれなら出家すると拒絶したので，厳島の内侍が生んだ清盛の7女御子姫君に代わった．法皇はこれを辞退しているが事は必ず遂げられるだろうという忌まわしい噂で，これには兼実も耳を疑った．

しかし，これに類似する先例は既にあった．延慶本・第一本（巻一）「八　主上，上皇，御中不快の事　付けたり二代の后に立ち給ふ事」には，二条天皇が故近衛院の后（藤原多子）を宣旨によって入内させたことが記されている．さらに延慶本は，この入内は天下の大事件として，公卿僉議が催され，震旦の則天皇后が太宗・高宗両帝の后に立った先例はあるが，本朝の神武天皇以来，人皇70余代に及ぶまで，いまだ二代の后に立った例はないと，諸卿一同が口を揃えて反対したが，宣旨をとどめることはできなかった．この入内は，永暦元年（1160）正月26日のことで，邦綱が忠通の側近として仕えていた時代のことである．

また，『玉葉』承安3年（1173）6月6日条には，「関白（基房）新妻を迎へらるべしと云々．入道大相国の娘（世に白川殿と号す．故摂政殿の室家なり）．世間遍く謳歌．実否を知らざるものなり」と，基実の後を継いだ基房に，基実の後家である盛子を嫁がせる話もあったのである．基房は，すでに故内大臣藤原公教（三条家）の娘を妻にし，承安元年8月には前太政大臣藤原忠雅（花山院家）の娘を新たに北政所に迎え，摂関としての権威を高め

ていたが，盛子との婚姻には，膨大な摂関家領を自らのものにしようとする思惑があった．『玉葉』の11日条には，「或人云はく，関白辺の事，来たる二十一日，若しくは二十六日の間と云々．これ偏に法皇の御結構と云々．万事狂乱の世なり．言ふこと莫(なか)れ，言ふこと莫れ．但し実否未だ聞かず」と，後白河法皇の関与が噂されたが，結局その婚姻話は実現に至らなかった．

この婚姻不成立について，河内祥輔氏は，「おそらくは清盛が反対したのであろう．清盛は，基通に摂関家を継承させるという既定方針に固執したとみてよかろう」，また基通と清盛の6女完子との婚姻が既に成っていたはずだともいう[25]．加えて，不成立の陰には盛子の後見役としての邦綱の暗躍が想像される．

(2) 清盛の直情を制する邦綱の策謀

そもそも清盛は，直情径行の武人だった．保元・平治以来緊密な関係にあった後白河院が，安元3年（1177）6月，平氏打倒の「鹿ヶ谷事件」に加わったことを知った清盛は，延慶本・第一末（巻二）「十八　重盛，父に教訓の事」によると，院への思いは断ち切り，鎧や馬の用意を家臣に命じ，院を「鳥羽殿への御幸とは聞こえけれども，内々は法皇を西国の方へ流し進らすべき由をぞ議せられける」と，院の配流を決めていた．

しかし，この処断は次のような重盛の諫めによって回避された．

> さすが吾が朝は，辺地粟散(へんちじょくさん)の境と申しながら，天照大神(てんせうだいじん)の御子孫，国の主として，天児屋根(あまつこやね)の御末，朝の政を掌(つかさど)り給ひしより以来，太政大臣の位に昇る人，甲冑をよろふ事，輙(たやす)かるべしとも覚え候はず．方々御憚り有るべく候ふ物を．就中(なかんづく)御出家の御身也．夫(そ)れ三世諸仏，解脱同相(げだつどうさう)の法衣を脱ぎ捨てて，忽ちに甲冑を帯し坐(ま)しまさん事，既に内には破戒無慚(はかいむざん)の罪を招き給ふのみに非ず，外には又仁・義・礼・智・信の法にも背き候ひぬらんとこそ覚え候へ．

また，延慶本・第二末（巻五）「廿五　大政入道院に起請文かかせ奉る事」によれば，治承4年（1180）9月に，高倉院が厳島神社に参詣し，願文を捧げ，奉幣した後に，社殿の回廊で終夜の祈願をした際のこと，清盛と宗盛が高倉院に，「東国に兵乱起こりて候ふ．源氏に御同心あらじと御起請文あそばして，入道に給はり候へ」と，「これからも源氏に心動かすことはない」という起請文を強要したのである．

これらの逸話から，徳子を二代の后にしようとするような奇策は，清盛の発案とは考え難く，重ねての入内の噂を記した『玉葉』に「禅門(清盛)及び二品(時子)，承諾の景色あり」とするのも，他者から持ち掛けられたことを推測させる．そして，当時清盛にこれほどの提案をし，承諾させることができる人物は，「現世の得意，此の人に過ぎたる人有るまじ」と清盛にいわしめた邦綱以外には考えられない．

そもそも，徳子が高倉天皇の中宮として入内したのは，叔母である建春門院滋子の引立てによるもので，清盛が王家との政略に徳子の入内を積極的に用いたものではなかった．

それに引き換え邦綱は，子息清邦を清盛の養子に，娘輔子は清盛の五男重衡の正室とし，安徳天皇の乳母ともなった．そのほかの娘たちも，六条天皇の乳母（成子）や，高倉天皇の乳母（邦子），平徳子（建礼門院）の乳母（綱子）と，王家や平氏との親密な関係を構築するために子供たちを存分に利用した人物である．従って，清盛を取り巻く奇策の数々は，自らの思惑を織り込みながら，邦綱が立案したと推測されるのである．

治承5年正月14日に高倉上皇が崩御すると，清盛と邦綱が一番懸念していた後白河院政の復活が現実のものとなったが，『玉葉』の30日条には，「去る二十五日禅門少女（安芸御子姫君と号す．これなり），法皇の宮に納る．只付(つき)女の如くなり」と，後白河院の辞退にもかかわらず，清盛の7女御子姫君が，低位の処遇ながらも後宮に入ったことで，清盛と邦綱は後白河との関係修復に希望を繋いだ．また，再三日延べとなっていた准后の宣下も，『玉葉』2月17日条は，「故摂政(基実)の姫君（生年十九），密々入内す．即ち同輿と云々」と記し，

清盛と邦綱を安堵させた．しかし，それも束の間のこと，清盛と邦綱はそろって病に倒れたのであった．

3. 清盛と邦綱の病状

(1) 清盛の病状と経過

ここで臨終にいたるまでの清盛の病状について，『平家物語』延慶本・第三本（巻六）「十三太政入道他界の事　付けたり様々の怪異共有る事」に見てみたい．

> 病付き給ひける日より，①水をだにも喉へ入れ給はず．②身中熱する事，火燃ゆるが如し．臥し給へる二，三間が中へ入る者，あつさ堪へ難ければ，近く有る者希也．宣ふ事とては，「あたあた」と計り也．〔傍線・筆者．以下同じ〕

遂には，銀・金・七珍万宝などを寺社に献納して，快方を願ったが，その甲斐もなく病は重くなるばかりで，

> 入道は音（こえ）いかめしき人にておはしけるが，③音（こえ）もわななき，息もよはく，事の外によはりて，④身の膚へ赤き事は，朱を指したる者にことならず．吹き出だす息の末に当たる者は，炎に当たるに似たり．

清盛の病状をまとめると，病ついた日から，

①水も喉を通さなかった

②燃えるほどの高熱を発した

多少の時間的な経過があって，

③声が震え，呼吸が弱くなった

④膚が朱をさしたほどに赤くなった

清盛の病状についての記録は，『玉葉』にも見える．治承5年2月27日，「邦綱卿二禁を煩ひ，禅門（清盛）頭風を病む」と，二人の発病を記す．翌28日には「禅門の頭風，事の外増あり」と，重篤であることを知る．29日には「今日，基輔朝臣を以て，禅門并びに邦綱卿等の許に遣はし疾ひを訪ふ」と，家司の藤原基輔を見舞いに派遣．閏2月1日，「夜に入り有安来たりて云はく，禅門の所労，十の九はその憑み無し」と，箏の師匠の中原有安から，清盛は回復の見込みが薄いと知らされる．2日には，「使を以て禅門，邦綱等を訪ふ」．3日「禅門の所悩，殊に進み」，4日には「夜に入り伝へ聞く，禅門薨去すと」．そして5日「禅門の薨逝，一定なり」と，清盛の死を確認している．

歌人・藤原定家の日記『明月記』も，閏2月5日条に，「去る夜戌の時，入道前太政大臣已に薨ずるの由，所々より其の告げあり．或は云ふ，臨終動熱（どうねち）悶絶の由巷説[26]」と，清盛が熱病に苦しみながら死んだらしいとの噂を記し，『平家物語』に描かれた「身の内のあつき事，火をたくが如し」などの病状を裏付けている．

また，鎌倉後期の歴史書『百練抄』（編者未詳）は，「閏二月四日，入道太政大臣（清盛公，法名浄海）薨ず（年六十四）．天下走騒．日来所悩有り，身熱火の如し，世に以て東大興福を焼くの現報と為す．八日葬礼[27]」と，『平家物語』延慶本にいう「金銅十六丈盧舎那仏を焼き奉り給ひたる伽藍の罰を，立所にかぶり給へるこそ」と時の人々の噂話が，100年余りの間に現報説の確信的な事実として位置づけられている．

(2) 邦綱の病状と経過

『玉葉』は，邦綱の病状の経過についても伝えている．治承5年2月27日条で，「邦綱卿二禁を煩ひ，禅門（清盛）頭風を病む」とあるが，「二禁（にきみ）」とは『日本国語大辞典』によると，「腫物．また，面皰（ニキビ）のこと」として，平安末期の国語辞書『色葉字類抄』の「痤 ニキミ．二禁 同」などの用例を列記している．

この日以降，29日には，先述のとおり，兼実は家司基輔を清盛と邦綱の見舞いに派遣，閏2月1日には，有安から絶望的な清盛の容態とともに，「邦綱卿の所労，太だ以て畏怖あり」と聞く．2日には再び清盛と邦綱の見舞いに使者を送り，3日には清盛の病状悪化とともに「邦綱卿の二禁増あり」と記している．

『玉葉』は，清盛の死後も邦綱の臨終出家（4日）のことや，一進一退の病状を記しているが，14日には，「早旦，使を邦綱卿の許に遣はす．今日，

憲基針を加ふと云々．仍つて訪ふ所なり．使者帰り来たりて云はく，膿汁快く出で，苦痛頗る減ず．而れども力無く弥増すと云々．午の刻，全玄僧正来たる．邦綱入道，大略その憑み無しと云々」と，針を使って膿を出したとあり，16日には，「大納言入道の所労，定成，憲基，共に必死の由を申す．憲基，今旦身の暇を得て退出し了んぬ．その後，筑紫の医師法師出で来たり，療法を加ふ．本の針穴より膿汁を浮き出す，五六杯」，17日には，「邦綱入道，筑紫の医師療治を加ふと雖も験無しと云々」と，筑紫の医師の先進的な治療も効果がなく，23日「申の刻，人告げて云はく，邦綱卿入道，已に入没し畢んぬといへり．（中略）黒谷聖人（法然）を以て善知識をなすと云々」，翌24日「邦綱入道，今夜葬送と云々」と，あわただしく葬儀が行われたというのである．

ここで，邦綱の病状を整理すると，

①顔や胸，背に，ニキビのような発疹が現われ，重篤

②皮下に膿がたまり，針で抜く，その量「五六杯」

『玉葉』からは，以上の2点が確認されるが，兼実は，清盛の病状でも，熱などの具体的な症状には触れていないことも忘れてはならない．

4. 清盛と邦綱の死

(1) 清盛と邦綱の死因は溶連菌感染症

篠田達明氏は，先に紹介したように，『病気が変えた日本の歴史』の中で，清盛の死因を溶連菌による「電撃性猩紅熱」と診たて，症状などについて詳述している．

> 猩紅熱は突如高熱を発し，頭痛，嘔吐，けいれん，猩々のような赤い顔，そして全身に紅斑がみられる．原因は溶血性連鎖球菌（溶連菌）の飛沫感染である．菌はヒトの扁桃腺に侵入し，晩秋から春にかけて流行するが，現代では，ほとんど一年中みられる．昔は電撃性猩紅熱と呼ばれる悪性型が猛威をふるった．激烈な中毒症状と経過の早さで恐れられたが，抗生物質のおかげで近年はまれである．
>
> 潜伏期間は二日から五日．咽頭痛ではじまり悪寒がして三十九度から四十度ぐらいの高熱がでる．大人よりもこどもに多く，咽頭痛・高熱・発疹を主症状とする[28]．

また，『家庭医学大辞典』によると，溶連菌感染症は，「①癤，膿痂疹などの皮膚の化膿性疾患，②中耳炎，乳様突起炎などの局所の化膿性疾患，③扁桃炎，咽頭炎などの上気道の急性炎症性疾患，④猩紅熱，敗血症などの全身性疾患[29]」など，様々な症状が現れるという．

邦綱の「二禁（にきみ）」は，①顔や胸，背に，ニキビのような発疹が現われ，②皮下に膿がたまり，これを針で抜いていることから，清盛と症状は違うものの，溶連菌感染症とみて間違いない．

篠田氏は，2013年刊行の『偉人たちのカルテ』の中で，清盛の死因を「感染症法」5類に掲げられている「劇症溶血性レンサ球菌感染症」と推定しているが，『感染症の事典』によると，その症状は，「突発的に発症し，急速に多臓器不全に進行するA群レンサ球菌による敗血症性ショック病態である．メディアなどで『人食いバクテリア』といわれた病名で，センセーショナルな取り上げ方をされた」ことがあり，「発症すると数十時間以内には軟部組織壊死，急性腎不全，急性呼吸窮迫症候群（ARDS），播種性血管内凝固症候群（DIC），多臓器不全（MOF）を引き起こし，患者をショック症状から死に至らしめる[30]」と，症状の進行が非常に急激かつ劇的なもので，国立感染症研究所の統計[31]によると，日本国内で2013年1年間に203件の報告があった．

およそ1週間の闘病期間があった清盛の場合は，『病気が変えた日本の歴史』の診立てどおり，溶連菌感染症の中でも猩紅熱の症状が顕著だったとみるべきだろう．

かつて猩紅熱は，死亡率の高い病気で罹患すると隔離されていたが，ペニシリンなどの抗生物質の普及によって，入院することなく自宅療養で治療が可能になったものの，猩紅熱という病名がなくなったわけではない．

小児科定点医療機関（全国約3,000カ所の小児

科医療機関）が，週単位で届出ることとされる「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎」についての厚生労働省の通知には，その臨床的特徴として，「乳幼児では咽頭炎，年長児や成人では扁桃炎が現れ，発赤毒素に免疫のない人は猩紅熱といわれる全身症状を呈する．気管支炎を起こすことも多い．発疹を伴うこともあり，リウマチ熱や急性糸球体腎炎などの二次疾患を起こすこともある[32]」と記されている．

また，学校保健安全法の「学校において予防すべき感染症」の中にも「溶連菌感染症」は指定され，「扁桃炎など上気道感染症，皮膚感染症（伝染性膿痂疹），猩紅熱などが主な疾患[33]」であると説明されており，現時点で猩紅熱は，隔離などの法的規制を受けなくなったということに他ならないのである．

因みに，猩紅熱となる可能性もある「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎」は，国立感染症研究所の統計では，2013年中に日本国内の3,142の小児科定点から，253,953件（定点当たり80.83）の報告があり，溶連菌感染症は，今でも決して軽視できない疾病なのである．

（2）死に至る密談

それでは，どのようにして清盛と邦綱が同時に発病することになったのだろうか．感染のルートは様々に考えられるが，清盛の周辺では他に感染の記録がないことから，病原菌は外から持ち込まれた可能性が高い．さらに，外部の人間で，飛沫感染の恐れがある1～2メートルの距離で話し合える，というよりも，話す必要があったのは邦綱をおいてほかにないだろう．

治承5年正月25日，後白河院が固辞していた御子姫君が入内し，2月17日には，徳子が異議を唱えた准后の宣旨も，清盛と邦綱の思惑どおりに運び，後白河院と平氏の微妙なパワーバランスが当面保たれることになった．しかし，日に日に高まる源氏軍の攻勢に，次の策を講じなければ，やがては宣旨によって平氏が逆賊に下りかねない状況にあったからである．

一方，邦綱の感染経路として疑われるのは，高倉院の周辺である．『玉葉』治承5年正月13日条には，高倉院の崩御直前の病状を「御面手足頗る腫れ給ふ．又殊に熱気を厭はしめ給ふ．遙に火気を去り御衣を薄くす．猶以て重しとなす」と伝えているが，これは清盛の症状とも，邦綱の症状とも酷似している．

さらに，翌14日の『玉葉』は，高倉院の崩御を記し，葬儀について「今夜最略儀を用ひられ，隆季卿，兼光朝臣等奉行すと云々．今夜御斎会終り，夜に入り始め行はる．上卿一人も参らず」と，崩御のその日のうちに土葬されている．歴代天皇の中で，崩御のその日に葬儀が行われた例は，蘇我馬子に暗殺された崇峻天皇以来の異例なことであった[34]．

富士川游の『日本医学史綱要2』によると，

> 猩紅熱は，明治時代に至りて，我が邦に流行したり．古昔の医書に載する風癮疹（かさほろし），風疹，丹疹等を以て猩紅熱に当つる説あれども，従うべからず．蓋し，猩紅熱が麻疹，風疹等と明瞭に区別せられしは，西洋にありても十七世紀の後半なりき[35]．

とあり，清盛の時代において，猩紅熱は判別できない病だった．

ただ，富士川游の『日本疫病史』には，「痘瘡流行の当初には，時人これを異病と称し，別居を造り，病者をここに居らしむる[36]」と，平安末期に編纂された『本朝世紀』の記述を紹介している．つまり清盛の時代には，すでに重篤な疫病（えきびょう）の診立と患者の隔離が行われていた．従って，死んだその日の葬儀や，上皇の葬儀にもかかわらず上卿が一人も参列しなかったという事態は，病状から明らかに重い疫病と恐れられたからではないのだろうか．そう考えると，春宮の権大夫となって以来，高倉院の第一の側近として仕えていた邦綱であれば，高倉院周辺からの感染は十分に考えられる．

前年の治承4年は，極端に降水量が少なく西日本一帯の農産物は激減し，翌5年にかけては「養和の飢饉」と呼ばれる歴史的な大飢饉となり，京の都では疫病が蔓延した．『方丈記』には，仁和

寺の隆暁法印という僧が，死体を見るたびに額に功徳深甚な梵語の「阿」の字を書いて仏縁を結ばせ，成仏に導いたとあり，その数は4・5月の2か月間で，左京に限っても42,300人余りだったという[37]．従って，邦綱への感染経路を限定することは難しいが，少なくとも邦綱も死の翌日には葬られていることから，当時の人々には邦綱の病が高倉院同様の重篤な疾病と理解されたのであろう．

『養和元年記』閏2月4日条によると，「太政入道薨．去月廿二日頭風発気．同廿四日温気発動[38]」と，清盛は2月22日に頭痛を発症し，24日に発熱したとあること，また溶連菌感染症の潜伏期間が2日から5日であることを考慮すれば，17日の准后通子の入内直後に，清盛と邦綱は至近距離で言葉を交わしたにちがいない．

究極的には守るべきものを異にしながら，合従連衡の時代を清盛の武力と，邦綱の知力で牽引しようとする最後の戦略協議は，死に至る密談となったようである．

おわりに

『玉葉』の閏2月23日条は，邦綱について次のように記す．

> 邦綱卿は，卑賤より出づと雖も，その心広大なり．天下の諸人，貴賤を論ぜず，その経営を以て偏に身の大事となす．これに因り，衆人惜しまざるなし．但し平禅門藤氏を滅亡す．この人頗るその事に与るか．故に神爵を蒙る疑ひあり．恐るべし恐るべし．

前段では「衆人惜しまざるなし」と邦綱の厚い人望を讃えながら，「但し平禅門藤氏を滅亡す．この人頗るその事に与るか」と，邦綱が藤原一門でありながら平氏による「摂関家領押領事件」の陰謀に関わったために，神罰がくだったのではないかと疑ったのである．

また赤木志津子は，「藤原邦綱考」の中で，「邦綱という人物は，大勢力の平氏の中に生きた藤原の族なのである．邦綱は巧みに時勢をよみ，その藤原の主，忠通を立てその人に従い周囲と交り，しかも平氏の中にたくみに地歩を占めた[39]」．また「とにかく賢くまめで人にもたのみにされた人間[40]」であり，「彼は時代に何の批判もせず権力ある者に近づきその為には我が子をも利用[41]」するも，「驕り高ぶる事がない[42]」人物だったと評している．

「大政入道とせめて志の深きにや，同日に病付きて，同月に遂に失せ給ひぬ．哀れなりける契りかなとぞ人申しける」と延慶本が記すように，清盛と邦綱が同時期に発病し，相前後して死んでいったが，その人物評は対照的である．

そして最も興味深いのは，二人の往生観である．『吾妻鏡』によると，清盛の遺言は，「三ヶ日以後，葬の儀有る可し，遺骨に於ては，播磨国山田の法花堂に納め，七日毎に形の如く仏事を修す可し，毎日之を修す可からず，亦京都に於て追善を成す可からず，子孫は偏(ひとえ)に東国帰往(きおう)の計を営む可し者[43]」と，死後3日以後葬送，清盛の山荘があったとされる明石海峡を望む景勝の地・播磨国山田郷の法華堂に納骨，7日ごとに追善法会を指示しながら，京都での法会を禁じている．清盛の往生観は，奈良から平安時代にかけての多くの貴族同様，現世における一族の栄華を願い，死後も現世の栄誉そのままの極楽往生を願っている．

一方，権威も権力も持たない邦綱は，『玉葉』に「黒谷聖人(法然)を以て善知識をなす」とあるように，摂関家と平氏政権との狭間を巧みな策謀によって生き抜いた人生に虚しさを覚えたのか，現世を穢土（汚れた世界）と観じ，その穢土である現世を厭離（離れること）しようとする法然の「専修念仏」という新たな浄土思想に来世を託したのである．

合従連衡の忙しい時代を主体的に生きた清盛と，これを支えた腹心の邦綱の対照的な往生観ではあるが，こうした混沌とした史実こそが，古代と中世の思想的分水嶺を顕著に示しているといえるだろう．

注および参考文献

1）『平家物語』の引用にあたっては，延慶本注釈の会

編『延慶本平家物語全注釈』第一本（巻一）～第三本（巻六），東京：汲古書院；2005–14を参照した．また，引用には釈文を使用し読みやすさを図った．個々の引用には，本文の中で章段を明示し，出典頁の注記を省略した．
2）吉川英治．新・平家物語・第六巻．東京：朝日新聞社；1963．p. 294
3）海音寺潮五郎．武将列伝・上．東京：文芸春秋；1966．p. 68．「頭風」については，『日本国語大辞典』に，『色葉字類抄』（1177–81）の「頭風　ツフ俗　カシライタキヤマイ」を用例として揚げている．
4）吉屋信子．女人平家・後編．東京：朝日新聞社；1971．p. 217–8
5）森村誠一．平家物語・第三巻．東京：小学館；1994．p. 325
6）宮尾登美子．宮尾本・平家物語・三〈朱雀之巻〉．東京：朝日新聞社；2003．p. 236
7）奈良恒徳．本朝医談．江戸：伊勢屋忠右衛門；文政5年（1822）．18丁
8）服部敏良．日本医学史研究余話．東京：科学書院；1981．p. 188
9）若林利光．英雄たちのカルテ．東京：オーエス出版；1994．p. 92–3
10）大坪雄三．英雄たちの臨終カルテ．静岡：羽衣出版；2001．p. 42
11）前掲書（注10）．p. 26
12）篠田達明．病気が変えた日本の歴史．東京：日本放送出版協会；2004．p. 56
13）篠田達明．偉人たちのカルテ．東京：朝日新聞出版；2013．p. 59
14）岩淵悦太郎．清盛の「あつち死」．（東京大学国語国文学会編．国語と国文学．東京：明治書院；1937–07．p. 87–90）/ 冨倉徳次郎．平家物語全注釈・中巻．東京：角川書店；1967．p. 218 / 佐々木八郎．平家物語評講・上．東京：明治書院；1963．p. 744 / 杉本圭三郎．平家物語・六．東京：講談社；1984．p. 127
15）元木泰雄．平清盛の闘い．東京：角川書店；2001．p. 263–4
16）岡見正雄，赤松俊秀校注．愚管抄（日本古典文学大系86）．東京：岩波書店；1967．p. 241．以下，引用文のカタカナ表記は，平仮名に改め読みやすさを図った．
17）前掲書（注16）．p. 241–2
18）『玉葉』の本文引用にあたっては，高橋貞一『訓読玉葉』第一巻～第五巻，東京：高科書店，1988を参照した．個々の引用には日付を明示し，出典頁の注記を省略した．
19）前掲書（注16）．p. 257
20）前掲書（注16）．p. 248
21）増補史料大成刊行会編．増補史料大成・第二十八巻（山槐記三）．京都：臨川書店；1965．p. 150
22）藤井譲治，吉岡眞之監修・解説．高倉天皇実録・第二巻．東京：ゆまに書房；2008．p. 828
23）田中文英．平氏政権の研究．京都：思文閣；1994．p. 281–3
24）元木泰雄．平清盛の闘い．東京：角川学芸出版；2001．p. 115
25）河村祥輔．日本中世の朝廷・幕府体制．東京：吉川弘文館；2007，p. 121
26）今川文雄訳．訓読明月記・第一巻．東京：河出書房新社；1977．p. 24
27）黒板勝美．日本紀略後編・百練抄．東京：国史大系刊行会；1929．p. 106
28）前掲書（注12）．p. 55–6
29）小学館・ホームメディカ編集委員会編．家庭医学大辞典．東京：小学館；2008．p. 810
30〉国立感染症研究所・学友会編．感染症の事典．東京：朝倉書店；2004．p. 83
31）国立感染症研究所．感染症発生動向調査年別一覧表（2013年）；同研究所ウェブページ（http://www.nih.go.jp/niid/ja/allarticles/surveillance/2085-idwr/ydata/5151-ydata2013.html）（2015.12.15取得）
32）厚生労働省．感染症法に基づく医師の届出のお願い；指定した医療機関が，患者の発生について届出を行う感染症；同省ウェブページ（http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou11/01-05-17.html）（2015.12.15取得）．「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎」の統計も同様である．
33）文部科学省．学校において予防すべき感染症の解説；2013．p. 44. 同省ウェブページ（http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afieldfile/2013/05/15/1334054_04.pdf）（2015.12.15取得）
34）井上亮．天皇と葬儀．東京：新潮社；2013，p. 127
35）富士川游・小川鼎三校注．日本医学史綱要2．東京：平凡社；1974．p. 152
36）富士川游・松田道雄解説．日本疫病史．東京：平凡社；1969．p. 139
37）西尾実校注．方丈記・徒然草（日本古典文学大系30）．東京：岩波書店；1957．p. 13–4
38）成簀堂文庫刊行会編．養和元年記（複製巻子）．東京：主婦の友社；1985．
39）赤木志津子．摂関時代の諸相．東京：近藤出版社；1988．p. 271
40）前掲書（注39）．p. 273
41）前掲書（注39）．p. 275
42）前掲書（注39）．p. 281
43）龍肅訳注．吾妻鏡一（文庫版）．東京：岩波書店；1939．p. 70

The Cause of Death of Taira no Kiyomori: A Possible Connection with the Death of Fujiwara no Kunitsuna

Masaki AKATANI

Tōhoku University Graduate School, Faculty of Arts and Letters

Taira no Kiyomori was struck by an unimaginable fever and died in the spring of Jishō Year 5 (1181). In the coup d'état of Jishō Year 3 (1179), Kiyomori ended the Go-shirakawa cloistered government through military force and established the Takakura cloistered government as a puppet regime in the following year. The regime lasted only a short while, however, as the retired Takakura Emperor passed away within less than a year. Kiyomori's death immediately followed the restoration of the Go-shirakawa cloistered government. The cause of Kiyomori's death has previously been discussed in the fields of literature and medicine and has been diagnosed variously as malaria, cerebrovascular disease, pneumonia, or meningitis contracted from complications of influenza, scarlatina fulminans (scarlet fever), and so on. However, considering the fact that Kiyomori—who was anxious about restoring relations with the retired Go-shirakawa Emperor as well as subjugation by the forces of the Minamoto clan, which were growing daily in strength—and his close aide Fujiwara no Kunitsuna simultaneously fell ill and died one after the other, it is speculated that both figures had streptococcal infection. It is, therefore, surmised that, during the clan's twilight years, Taira tactics were determined through secret discussions between Kiyomori and Kunitsuna.

Key words: Streptococcal infection, Taira no Kiyomori, Fujiwara no Kunitsuna